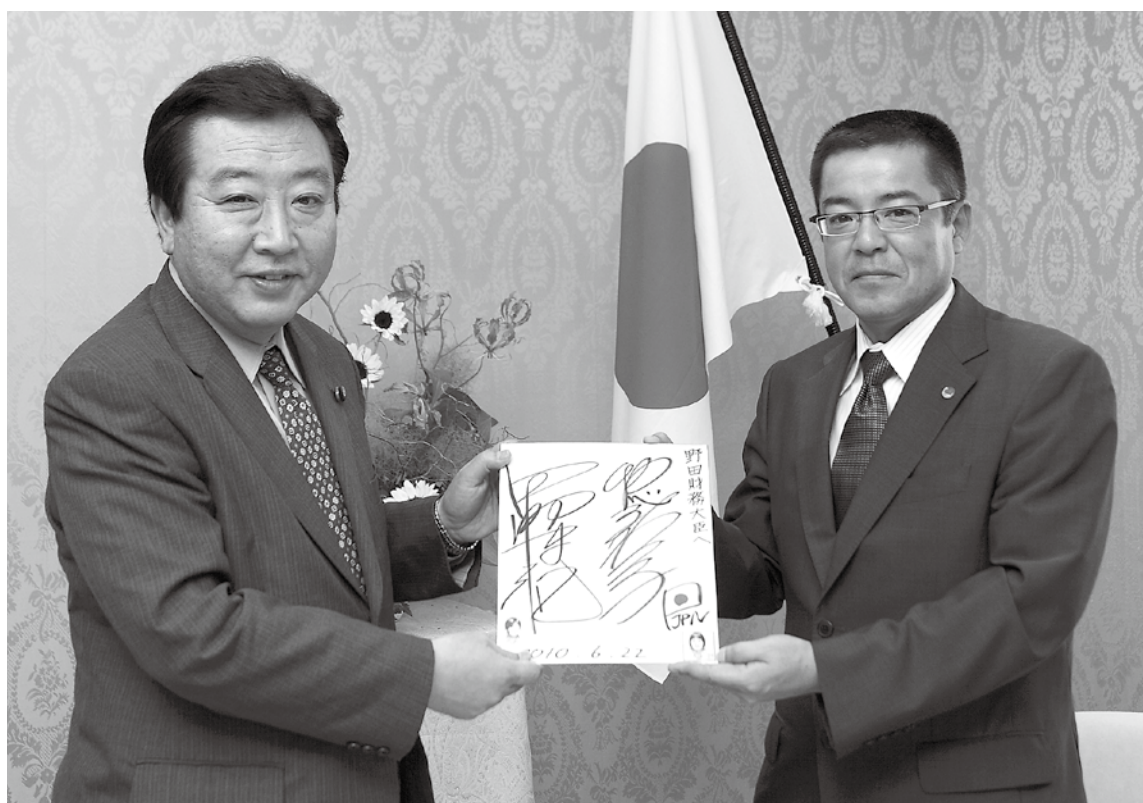

野田大臣 対談 メダリストを支えた 日本の中小企業

田中 洋一郎氏

(ダイチ株式会社 代表取締役社長)



出席者：野田 佳彦 財務大臣
田中 洋一郎 ダイチ株式会社 代表取締役社長
迫田 英典 前・大臣官房 総合政策課長（司会）

開催日：2010年6月22日（火）

不況下でも社員を守り続けてきた 日本の中小企業

▶司会 (迫田) まず野田大臣のほうから、今回、社長との対談を希望されたきっかけについてお話しいただければと思います。

▶野田 (財務大臣) 財務省で『法人企業統計調査』というのをずっとやっているんです。その中で、大変興味深い統計だなと思ったのが、大企業と中小企業それぞれの役員報酬と従業員の給与総額の推移でした。ちょうど2000年から2008年までの傾向が出ていたのですが、それを見ると、大きな企業は役員報酬が上がっているんです。だけど、働いている人たちの給与総額は下がっているんですね。これはおそらく、中国などのライバル企業に勝って国際競争力をつけなくてはいけないから、人件費を抑制して非正規雇用を増やしたといった要因があるのでしょう。しかし中小企業は逆なんです。中小企業で働いている人たちの給与はほぼ横ばいか微増になっていて、一方で役員給与が下がってきている。中小零細企業では、従業員の皆さんの暮らしを守るために役員の皆さんが身を削っているところが多いということでしょう。そういった実情が統計にもろに出ているなと思いました。

そんな統計を見ていたときに、あのバンクーバー冬季オリンピックで、スピードスケートのチームパシュートでの日本選手の活躍ぶりを拝見したのです。

スケート部というのは、今までは大手の企業が抱えていたではないですか。ところがあの銀メダリスト3人のうち2人の女性がダイイチという会社のスケート部所属で、その会社では社長を含めて御自身の給料をカットしながら、従業員の給料を減らしたくないという思いでスケート部を続けてこれたのだということ、報道等で知りました。

ちょうど先ほどの統計を見ていたころだったものですから、まさにこういう素晴らしい中小企業があるんだなと。従業員の暮らしを守るだけでなく、スポーツの振興も含めて、中小企業の志

が今日本を支えているなということに大変感動しました。それで、ぜひ対談したいと申し上げたのでした。

▶田中 そうですか。ありがとうございます。

▶司会 あの辺はやはり社長の思いが反映されたもののなのでしょうね。

▶田中 新聞とかテレビなどでよく取り上げていただいたのですが、じつは我々自身は「会長・社長の給料を削ってスケート部を維持した」という意識は全くないんですよ。ただ単純に会社が赤字になったから、削るべきところはどこか？という話になって、「スケート部ではなくてまず役員の給料を削りましょう」となっただけなんです。スケートを金勘定で考えたことは全くなかったですし、だから続けてこれたのかなという感じがありますね。

▶野田 従業員の給料は下げたくないという、その思いが根底にあったんですね。

▶田中 それはもう絶対下げたくなかったです。従業員の給料を下げる前に何かすることはないかと会長——うちのおやじですが——と話して、「まず手をつけるのはこっちだろ」と。

▶司会 結果的にそれがオリンピックの好結果につながったということにはなりますよね。相当な反響はありましたか。

▶田中 ありました。2～3日、当社のホームページがアクセス不能になってパンクしました。あんなことは初めてでした。あとはお祝いのメールですね。「本当に感動をありがとう」といったメールが1日500通ぐらいは来ました。中には、「何か協力をしたい」「寄附をしたい」「口座を開設して教えてくれ」というのもあったんですよ。そのメールを見た次の日に、私は知り合いの新聞記者に、『『ダイイチは一切そういうことはしませんから注意してください』』というのをちょっと新聞に書いてくれ」とお願いしました。振り込め詐欺ではないですけど、そういうトラブルも心配して対応しました。それから500通ぐらい頂いたメールにはすべてお礼の返信をいたしました。

員なんですよ。赤字になって社員の首を切るぐらいだったら、ほかに何かやるべきことはないかと会長と相談して、続けてきたのがやはりよかった。

今回メダルをとることができたわけですけど、もともとはそんなに大がかりなものではなくて、「国体で優勝したい」というのが最初でした。それで一度、選手が国体で優勝してくれました。そうしたら会長がだんだんスピードスケートにはまっていきました。当社のスケート部だけでなく、やはりいろいろな会場に行って若い選手たちと会う機会が多いものですから、彼らのひたむきさに触れることができましたし、スケートに打ち込みたいけれど十分な環境がない——といった厳しい現実も見てきました。

それでたまたま田畑（真紀選手）が富士急をやめて、今当社にいる羽田という監督と2人で自分たちの貯金を切り詰めて、1年間どこにも所属せずにやっていると知ったのですよ。富山のスケート関係者から「田畑さんが苦しんでいます」と。あんなに強い選手が苦しんでいるのは放っておけませんから、会長と会って、「うちの会社は富士急さんのように贅沢はさせてやれない。それでもいいんだったら来るか？」とあって田畑と監督を引き取ったんですよ。それが田畑との出会いでした。

田畑は今回メダルをとりましたし、年齢的にも引退のいい機会なんですよ。だけど田畑は「引退するつもりはありません。まだまだ引退のイメージがわかりません」と言うんですよ。それで「スケートをやめたら故郷の北海道に帰るか？」と言ったら、「いや、帰りません。一番苦しい時に私を拾ってくれたのは富山のダイチです。私はスケートをやめてもここで働きます」と言ってくれたんですよ。すごくうれしかったです。

▶野田 それは固い絆ですね。

▶田中 最近はあまり流行らないですけど、義理人情というか、そういうものはありますね。

▶野田 今回メダル獲得ということもあって、やはり社員の皆さんの一体感みたいなものも深まっ

たのではないですか。

▶田中 そうですね。もう本当に深まりました。バンクーバーオリンピックの試合放映は早朝でしたよね。みんなで会社の会議室に集まってテレビの前で応援しました。あのオリンピックの期間、社員みんなが一つのものに熱くなれる機会を、選手たちは与えてくれた。だから選手たちに本当に感謝していますね。メダルをとった以上に、そういう機会を与えてくれたことに。

小さな会社だからこそ支えられた 「メダル獲得」の偉業

▶司会 お話を伺っていると、中小企業ならではのよさというか、経営者の考え方が隔々まで行き渡るし、先ほどおっしゃった一体感のようなものがぱっと醸成されるといった、中小企業ならではの強みがこういうところでも発揮されている気がしますね。

▶田中 マスコミの人にも「小さい会社なのによくできますね」と言われたんですよ。そうではなくて、「おれたちみたいに小さい会社だからできたんだ」と。大きな会社だと、例えば株主総会で「利益が上がらないのに何でスケートなんかやっているんだ」とか言われてしまうでしょう。こういう時代になればなおさらですね。我々のような小さい会社で、社長・会長の采配一つで何とでもなるようなところだからこそ、続けてこられたのではないかと。

▶野田 今、3人の部員になるわけですか。

▶田中 そうです。4月に1人入りましたので、3人になりました。それで監督が1人いますので、スケート部としては今、4人です。

▶野田 従業員40人規模の会社で、4人のスケート部を抱えてらっしゃるというのは…。

▶田中 そうですね。だから社員には、「スケート部は特別な存在ではないよ」といつも言っています。ダイチという会社に、たまたまスケートのうまいやつが2～3人いたと。それが通常の仕事のかわりにスケートをやっているだけだと。だから

別に特別扱いする必要もないと。

口で言ってもなかなかかわからないものですから、社員全部とスケート部とで飲み会をしています。飲むのが一番ですね、分かち合うためには。選手と監督、社員全部集めて、年に3回か4回は必ず飲みます。

ふだんから不満に思っている人間もやはりいるわけですよ。そいつはそいつで酔っぱらった勢いで言うんですよね。また、監督は監督で「スケート部はこうなんだよ」とちゃんと語ってくれるんです。それでまたうまくいったりして。本当に飲み会というのは最高ですね。そういうふうに、「スケート部は特別な存在ではないんだよ」ということをなるべく伝えるようにはしています。

やはり社員たちの理解ですよ。それがなかったらできないと思います。「会長・社長が給料を下げて…」というのがマス

コミにクローズアップされて、それでメダルをとったではないですか。そうしたら、その話を聞いて「会長と社長の給料だけでなく、僕らの給料も下げてください」と言ってきた社員が2～3人いました。このときは涙が出るほど感動しましたね。「よかったな。こんなことを言ってくれる社員がいるんだな」と。

▶野田 会社としては志が固まって、きずなが深まって、という感じでしょうね。数字には出てこないかもしれませんが、会社としては大きな成果があったということだと思いますね。

▶田中 それは本当に思います。

▶野田 田畑さんも現役を続行されて、穂積（雅子選手）さんもいらっしゃる。ということは4年



後のソチオリンピックもまた…。

▶田中 はい。ソチ大会も頑張ります。今年1月から新しく高校を卒業したばかりの女子選手がまた1人入りました。メダルをとりましたから、次の夢は、ぜひたくですけど当社の社員が3人、パシュートに出てくれればいいかなと願っています。

▶野田 大変すばらしい…。

▶田中 いや、とんでもないです。

▶野田 今度はぜひ、よりいい色のメダルを獲得されることを期待していますので。

▶田中 なかなか難しいと思いますが、頑張ります。

▶野田 社長は、今回はお留守番でテレビで応援していましたよね。



▶田中 はい、お留守番です。

▶野田 ぜひ今度次は社員の皆さんと応援に行かれたらどうかと。

▶田中 だめですね。まだまだ元気なのが1人いますから。それがあから生きているようなものですから。じつは前回のトリノオリンピックが終わったときには、「バンクーバーはおまえが行け」ということを言ったんですよ。それが去年の夏ぐらいですかね。「バンクーバーに行っているのか?」と言ったら、「ばかやろう。おれはまだまだ元気じゃないか。おまえは留守番だ」と言われて。今回もバンクーバーが終わってすぐにおやじに話をしました。「ソチはどうする?」と。そして、「おれが行くに決まっているだろう。おま

えは留守番だ」と言われました。でもおやじが元気というのはうれしいですね。

▶野田 国民にも夢を与えましたけど、会長自身の夢なんですかね。

▶田中 そうですね。すごくよかったと思います。

▶野田 我々もそういう頑張っている中小企業にこれからもエールを送っていかねばいけません。まさに日本の企業の99%は中小企業ですし、働いている方の7割は中小企業が支えているのですから。この中小企業が元気になることが、やはり元気な日本をつくることにつながると思います。

中小企業の皆さんは、従業員の暮らしを支えているのはもちろん、スポーツ支援などを通じてさまざまな社会的な貢献をいただいていると思います。ただ、いざなぎ景気を超えた戦後最長の景気と言いながら、大

きな企業は収益を上げましたが、残念ながら中小企業とか家計にはその恩恵が届かなかったと思います。これからは、子ども手当や高校の無償化のような国からの直接的な生活支援などに、お金の使い方を変えようと努力しています。中小企業が負担していた部分を、少しでも手助けできればいいという気持ちで。

平成22年度の予算では、中小企業対策費は1,911億円でした。平成13年までは1,900億円台で、その後は大体1,600億円台～1,800億円台に落ちたのですが、その水準まで戻すなど、限られた財源で、そういう工夫をしながら中小企業の皆さんに大いに頑張ってください環境をつくっていきたいと思います。

ね。お金が回る社会をどう実現するか。こういうときに財務の担当も大変ですが、中小企業の皆さんが頑張っているのと同じだと思います。

企業の経営と国家経営とは、若干違うかもしれませんが、これはマネジメントの問題だと思います。だからぜひ、夢を持ちながら、従業員を守り、仕事もちゃんとやるという素晴らしいマネジメントをしてこられた田中社長に、学ばせていただきたいと思います。偉業ですからね。メダルをとって、人々に夢を与えるということは。

▶田中 今回メダルを獲得して初めてそうだったんだなと思いました。それまでは余りそういうことは考えていなかったんですけど、「すごいことをやったんだな」と。

▶野田 素晴らしいことですよ。日本もこの20年間ぐらい、閉塞感が漂っていますが、それを早く打ち払ってみんなが夢を持ってチャレンジできるような国にしたいですね。

子や孫たちのために

～未来の有権者も大切に政治

▶田中 私は子供たちに、「お前たちの子のために、お前たちも頑張らなければいけないよ」という話をするんですよね。我々の子や孫にはまだまだ未来があるじゃないですか。だから本当に「頑張れよ」と言っていけないと。それにそういう子・孫に明るい将来を残せるような日本という国をつくっていったらいいですね。

▶野田 今は有権者ではない子供たち、あるいはこれから生まれてくる人たちをおもんばかった政治ができるかどうか、ですよね。今さえよければいいと、バケツの水をざるに流し込むようなもったいないお金の使い方はもう絶対できないわけで、限られたお金を使いながらしっかりと未来につなげていくための工夫が必要だと思いますね。

アメリカの第3代大統領でジェファソンという人物がいるのですが、「子供たちに借金を残すようなやり方は詐欺と同じだ」と言っているんです。世界中どここの国も借金をしていますけど、余

りにも大がかりな詐欺を続けてきてしまったのではないかと思います。しっかり財政規律を守っていくというベクトルに、大きく変えていきたいんですね。子供の世代にうずたかく借金の山や環境負荷だけが残っていくという世の中は残したくないですものね。

▶田中 本当にぜひそうしてほしいです。夢が見られる社会、将来ですね。

▶野田 そうですね。あの『三丁目の夕日』で描かれていた昭和30年ごろ、私も昭和30年ごろに生まれているので、あの原風景は何となくわかるんですが、今より貧しかったけれど「きょうよりあしたはよくなっていくだろう」という夢や希望がありました。今は世界第2位の経済大国と言いながらも、「きょうよりあしたがよくなる」というイメージが余りないんですね。

▶田中 ないですね。

▶野田 そこをやはり変えていきたいですね。その意味ではスポーツというのは人に夢を与えますし…。

▶田中 そうですね。見ている人、応援している人にも夢を与えられるという、スポーツのそういう面はすごくいいと思うんですよね。

▶野田 我々もスポーツを大事にしていくという気持ちはあるんです。スポーツも事業仕分けの対象になっていますが、意図するところはやはり徹底した無駄遣いの排除。これはどんな分野にもあると思います。無駄は省きながら、これから夢を持ってメダルを目指すようなアスリートたちにきちっと予算が渡っていくようにする。それをチェックしていこうというのが事業仕分けなんですね。これはもしかすると誤解があるかもしれないので、ぜひ御理解をいただきたいです。スポーツはやはり頑張してほしいと思っていますから。

▶田中 わかりました。ちゃんとうちの選手に言っ、仕分けの広告塔にさせます。そうやって本当に頑張る選手にお金が行くようにしてもらえるのだったら、それはもうぜひやっていただきたいですね。